

埼玉学園大学・川口短期大学 機関リポジトリ

保育園児に対するベビーサインの教授時期に関する考察

| | |
|-----|---|
| 著者 | 赤津 純子 |
| 雑誌名 | 埼玉学園大学紀要．人間学部篇 |
| 巻 | 13 |
| ページ | 133-144 |
| 発行年 | 2013-12-01 |
| URL | http://id.nii.ac.jp/1354/00000290/ |



保育園児に対するベビーサインの教授時期に関する考察

The Effective Period of Teaching Baby Signs in Group Day-Care Scenarios

赤 津 純 子

AKATSU, Junko

Acredolo, L.P. & Goodwyn, S.W. (1996) が提唱する“ベビーサイン”（象徴的身振り）を保育に取り入れている保育所で意味語を獲得する以前の子どもたちがベビーサインを学んでいく過程の様相と集団保育の形態の特徴である（１）年齢（２）ベビーサインの教示を受けた期間（３）同じクラスで学ぶという経験を共有すること、のベビーサインの習得に及ぼす効果について検討した。

調査開始時に生後６ヶ月から２歳４ヶ月であった０歳児クラスと１歳児クラスの保育園児２６名の６ヶ月にわたる調査結果から、生後９ヶ月頃からベビーサインを自発的に使用するようになり、そのピークは１６ヶ月頃であること、ベビーサインの種類としては、「挨拶」「要求・指示」「形容・修飾」が先に獲得され、「食物」「動物」「乗り物」等の名詞は後から獲得されること、集団保育によりベビーサインを獲得していく過程には年齢の効果があり、教示経験期間、クラスの効果は大きくなかったことが明らかになった。教授時期に関しては、ベビーサインを用いた保育は１歳クラスの子どもよりも０歳クラスの子どもに対して強く影響することがわかった。

問題と目的

「ベビーサイン」とはAcredolo, L.P. & Goodwyn, S. (1996 たきざわ編訳, 2001) が提唱した育児場面で使用される定型化された象徴的身振りのことである。おとなが予め定型化された身振りを話し言葉と共に子どもに教示すると、子どもはその身振りを模倣しやがて自発的に使用するようになる。そして、両者がそれを共用することにより意思疎通を図ることができる。日本ベビーサイン協会によるベビーサインの例をappendix 1に示す。

Acredoloらは「ベビーサインは身振りによ

る言語的シンボルの利点をいかし、話し始める前の赤ちゃんがつかえるコミュニケーションの手段」(Acredolo & Goodwyn, 1996 たきざわ編訳, 2001 P53) であり「ベビーサインをつかえば、発音する能力が未熟な赤ちゃんでも、話し言葉以外の方法でコミュニケーションをすることができる」(Acredolo & Goodwyn, 1996 たきざわ編訳, 2001 P41)。また、おとなも「赤ちゃんとの新しいコミュニケーションの世界が広がっていることを実感することができる」(Acredolo & Goodwyn, 1996 たきざわ編訳, 2001 P23)、子どもが「言いたいことを理解することができるよう

キーワード：ベビーサイン、象徴的身振り、年齢の効果
Key words : baby signing, symbolic gesture, age effect

になる」(Acredolo & Goodwyn, 1996 たきざわ編訳, 2001 P87) としている。

子どもは有意味語を話すようになる以前には表情、泣き、身振り、喃語等の様々な前言語的手段を用いて意思伝達を試みようとする。この前言語的な表現が察知できず、「『まだ、何もわからないのだから話しかけてもむだだ』と、赤ちゃんに声をかけずに放っておく」((志村, 1989 P44) おともも見受けられるが、ベビーサインを用いると、そのようなおともははっきりとこの時期の子どもの意思がわかり、スムーズにコミュニケーションを図ることができる。また子どもには、おとなが発する言葉の意味は理解していても、構音機能が未発達なため、それに対する表出（返事をすることや、自分の要求を自ら言葉を発して表すこと）ができない時期があるが、この時期の子どもでも、ベビーサインを使用すれば自分の意思を適確に表現することが可能であるということである。

ベビーサインはアメリカでは個々の家庭で母親が子どもとのコミュニケーションを図る手段の一つとして利用され、使い方を教示する教室の普及や様々な実践本の販売等により一般に広がっていった。日本では、アメリカ在住の日本人の母親が帰国後その方法を流布するなどして広まり、現在ではいくつかの団体が作られている。当初はアメリカ手話(American Sign Language : ASL 以後ASLと記す)がそのまま使用されていたが、その後は日本手話を使用したり、子どもの発達を考慮し、より簡略化した手話を考案したり(近藤, 2004) など多様化してきた。

現在、日本において育児法としてかなり普及しているベビーサインではあるが、その学術的な検討はほとんどなされていない。アメ

リカでは、自発的に象徴的身振りを使うようになった子どもにベビーサインを直接教示し、その習熟過程の観察から、ベビーサインの習熟は話し言葉の発達を妨げるものではないことを見出した事例研究(Acredolo & Goodwyn, 1985) や、電話インタビューという各家庭で母親たちがわが子にベビーサインを教示した結果を収集する方法を用いてサンプル数を増やすことでそれを検証した研究(Goodwyn & Acredolo, 1993)、遅延モデルの提示、身体的ヒントや玩具や食べ物などの強化刺激の付与などの統制された訓練状況でのベビーサインの習得過程を吟味した研究(Thompson, Cotnoir-Bichelman, McKerchar, Tate & Dancho, 2007) など、種々のデータ収集法によるベビーサインの習熟過程についての研究がなされている。しかしながら、日本ではベビーサインの習熟過程に関する研究はまだない。

ベビーサインは、人工的に子どもに導入するものであり、子どもの発達上不可欠なものであるとは言い切れないが、近年、育児法としてブームになりつつあるベビーサインが導入された場合の、子どもの習熟過程について考察することは、子どもの言語発達における象徴的身振りの機能を探る手掛かりになると考えられる。

ベビーサインは、まず養育者自身が、ベビーサインを教える教室に通ったり、啓蒙書を読んだりして、それを習得した上で子どもに教えることになる。吉中(2002)は日本のベビーサインについて、ASLや日本手話を用いる「手話準拠型」と、子どもとおとなとのやり取りの中で独自に創り上げられる「自由創造型」の2つの流れがあると指摘している。家庭の中では「手話準拠型」と「自由創造型」を織

り交ぜて使用する場合もあるが、養育者と子どもとの関係が一对多数である集団保育の場合では、その場にいる全員が共通して理解できるように「手話準拠型」のみを用いている保育園がある（赤津・三浦, 2010）ように、「手話準拠型」が有効であると考えられる。

子どもたちが多種多様な、自発的な象徴的身振りを用いる集団保育では、この定式化されたベビーサインを保育者と子どもとが共有することの利便性は高く、それにより保育者がより明確に子どもの意思を汲み取ることが可能で、また子どもも適切に保育者に意思を伝達できる。ベビーサインを活用している保育園の保育者と保護者への質問紙調査結果ではベビーサインを媒介として、子どもとのコミュニケーションが円滑になったという意見が多く見られている（赤津・三浦, 2010）。ただし、子どもにかかわる保育者はベビーサインを予め習得しておく必要がある。

集団保育児はベビーサインに触れる機会が多くあるが、それは必ずしも家庭児のような双方向的なやりとりであるとは限らない。集団保育の中で子どもがベビーサインに触れる人的環境は、次の点で家庭とは異なる。

- ① 保育者は保護者と異なり大勢の子どもに対してサインを提示する場合と、保護者と同様に個人に提示する場合がある。
- ② 子どもは、保育者が他児に対して使用したり、他児が使用したりするベビーサインを見る機会がある。
- ③ 個々の子どもの月齢とは関係なく、新学期の始まる4月から、保育者は一様にベビーサインを使用した保育を始める。また子どもの入所時期も様々であるが、中途入所の子どものはその時からベビーサインを教示される。

集団保育において起こる、家庭児の場合とは異なる経験の吟味は、前述の先行研究では考慮されていなかった視点である。

本研究では、0歳児、1歳児クラスの子どもたちが示したベビーサインを保育者が記述した6ヶ月間の記録の分析を通し、集団保育という人的環境の中で意味語を獲得する以前の子どもたちが使用するベビーサインの出現から収束までの特徴を明らかにしア) 年齢、イ) ベビーサインの教示経験期間、ウ) 同じクラスで学ぶ経験の共有という集団保育の形態がベビーサインの習得にどのような影響を与えるかを検討する。このことを通して集団保育の中でベビーサインを効果的に教示する方策を明確化したい。

方法

1 調査対象

本研究では、実際にベビーサインを用いて保育を行っている千葉県内の私立保育園の0歳児クラス：13名（1回目の調査時に最年少の子どもは生後6カ月であり、最年長の子どもは1歳6カ月であった）、1歳児クラス：13名（1回目の調査時に最年少の子どもは1歳7カ月であり、最年長の子どもは2歳4カ月であった）の合計26名を対象とした。

この園では0、1歳児クラスでベビーサインを使った保育を行っていて、担当する保育者のうち、6名（0歳児クラス2名・1歳児クラス4名）の常勤の保育者は全員が日本ベビーサイン協会の講師認定試験に合格しているが、非常勤の保育者2名はこの限りではない。この園は前年の11月より園長の考えでベビーサインを導入している。そのため1年前より在籍している子どもは前年度に5ヶ月間ベビーサインによる保育を経験している。

保育者は言葉を付随させてベビーサインを使用しており、言葉とサイン両方の豊富な刺激環境の中で子どもは生活している。

なお、本調査に当たっては、園の協力を全面的に受けている。

2 調査期間

2007年10月から2008年3月までの6ヶ月間、毎月中旬に保育園を訪問して資料を収集した。

3 入手した資料

1) 保育者によって記述された月ごとの個々の子どもの出現ベビーサインの記録

保育者が自分の担当クラスの各児について、筆者訪問後1週間の保育中に気づいたベビーサイン（自発的に使用したもの・保育者に促されて使用したもの）を想起記録した（補助説明的な記載も含まれる）。この資料は1ヶ月後の訪問時に回収した。

2) 自由時間・一斉保育・昼食時間の観察

毎月1回計6回保育時間（自由時間・一斉保育・昼食時間）中の子どもと保育者の様子について筆者が非対流的観察をした。

結果及び考察

1 出現したベビーサインの種類と出現時期

保育者が教示できるベビーサインは130種類である（赤津・三浦, 2010 P43）

Table1は6ヶ月の調査期間の保育時間中に、子どもたちが自発的に使用したと保育者が判断したベビーサインの出現数を示したものである。このカテゴリー分類表は、小椋（1999）の語彙の分類方法を基に18カテゴリーを選定したものであり、この分類表の妥当性は、大学生95名に、保育者が保育場面で教示できるベビーサイン130種類をこの18カテゴリーの

いずれかに分類するように求めたところ、84.2%から100%の頻度を得たことからチェックした。18カテゴリーのうち、10カテゴリー31種類のベビーサインが出現した。これらはすべて、保育者が保育中に「よく使う」、「時々使う」と判断したベビーサインである。また内訳は、0歳児クラス、1歳児クラス別に調査期間前半（1回目から3回目）と後半（4回目から6回目）に分けて表した。

ベビーサインは、0歳児クラスでは調査前半より後半に、1歳児クラスでは後半より前半に、また1歳児クラスよりも0歳児クラスに多く出現している。

出現数の多いサインは「いただきます」（31個）、「もっと」・「帽子」（30個）、「おいしい」（26個）で、ほとんど0歳児クラスに出現している。これらは食事と散歩に関するサインであり、全て保育者の用いる頻度の高い（「よく使う」）ものである。1歳児クラスに多く見られるのは「自動車」、「電車」、「ヘリコプター」などの乗り物であり、0歳児クラスで多く使用されたものはほとんど消滅している。これは、言葉が用いられるようになったためと考えられる。

2 ベビーサインの出現順序

Table2にベビーサインのカテゴリー・月齢別の出現数（出現率）を示す。

自発的に使用するベビーサインは生後12ヶ月ごろから増加し、16ヶ月がそのピークであり、その後徐々に減少し25、26ヶ月に再び現れている。

「要求・指示」、「挨拶」、「形容・修飾」は初期の生後9ヶ月から、続いて「衣類」は10ヶ月から、「食物」は11ヶ月から、「質問」は12ヶ月から、「用品」は14ヶ月から、「動物」は15ヶ

園児に対するベビーサインの教授時期に関する考察

Table1 カテゴリー・クラス別ベビーサイン出現数

| カテゴリー | ベビーサインの種類 | 内訳 | | | | 合計 (個数) |
|----------|-----------|--------------|--------|--------------|-------|------------|
| | | 0歳児クラス (13名) | | 1歳児クラス (13名) | | |
| | | 1回～3回 | 4回～6回 | 1回～3回 | 4回～6回 | |
| 要求・指示 | もっと | 12 | 18 | 0 | 0 | 30 |
| | やって | 2 | 10 | 0 | 0 | 12 |
| | ちょうだい | 3 | 1 | 1 | 0 | 5 |
| | やめて | 0 | 0 | 1 | 0 | 1 |
| 挨拶 | いただきます | 10 | 21 | 0 | 0 | 31 |
| | ごちそうさまでした | 5 | 7 | 0 | 0 | 12 |
| | おしまい | 2 | 1 | 2 | 3 | 8 |
| | バイバイ | 2 | 2 | 0 | 0 | 4 |
| | どうぞ | 0 | 1 | 0 | 0 | 1 |
| 質問 | どこ? | 4 | 4 | 0 | 0 | 8 |
| 形容・修飾 | おいしい | 13 | 13 | 0 | 0 | 26 |
| | 痛い | 1 | 2 | 0 | 0 | 3 |
| 乗り物 | 自動車 | 0 | 0 | 7 | 1 | 8 |
| | 電車 | 0 | 0 | 7 | 1 | 8 |
| | ヘリコプター | 0 | 0 | 6 | 2 | 8 |
| | 飛行機 | 0 | 0 | 1 | 0 | 1 |
| 食物 | ミルク | 6 | 8 | 1 | 1 | 16 |
| | おやつ | 5 | 3 | 2 | 1 | 11 |
| | バナナ | 1 | 5 | 0 | 0 | 6 |
| | イチゴ | 0 | 5 | 0 | 0 | 5 |
| | リンゴ | 0 | 4 | 0 | 0 | 4 |
| | マンマ | 1 | 0 | 0 | 0 | 1 |
| 動物 | ウサギ | 1 | 1 | 1 | 0 | 3 |
| | キリン | 0 | 2 | 0 | 0 | 2 |
| | ブタ | 0 | 1 | 1 | 0 | 2 |
| | ネコ | 0 | 1 | 0 | 0 | 1 |
| | ゾウ | 0 | 0 | 1 | 0 | 1 |
| 衣類 | 帽子 | 7 | 21 | 1 | 1 | 30 |
| | 靴 | 2 | 13 | 1 | 1 | 17 |
| 用品 | 薬 | 2 | 9 | 3 | 3 | 17 |
| 玩具 | ボール | 0 | 0 | 1 | 0 | 1 |
| 一人当たりの平均 | | 6.077 | 11.769 | 2.846 | 1.077 | 10.885 |

($\chi^2=189.375$ df=90 P<.01:イエーツの補正)

月から、「乗り物」は20ヶ月、「玩具」は26ヶ月から自発的に使用されている。

資料として提示していないが、最初に現れたものは、生後9ヶ月のA（後述するTable3のA児。以下のアルファベットはTable3の対

象児を示す。）の示す「もっと」、「おいしい」「ばいばい」「いただきます」である。これらは「要求・指示」、「挨拶」に関するサインである。対象を示す名詞的な扱いのベビーサインに関しては「帽子」（生後10ヶ月のB）、「ミルク」（生

Table2 カテゴリー・月齢別ベビーサイン出現数（出現率）

| 月齢(ヶ月) | 9 | 10 | 11 | 12 | 13 | 14 | 15 | 16 | 17 | 18 | 19 | 20 | 21 | 22 | 23 | 24 | 25 | 26 | 27 | 28 | 29 | 30 | 31 | 32 | 33 | 平均出現月齢 |
|--------|------|------|------|------|-----|-----|------|------|------|------|------|-----|------|------|------|------|------|------|------|------|----|------|------|-----|----|--------|
| N(人数) | 3 | 3 | 6 | 6 | 5 | 5 | 6 | 8 | 6 | 6 | 8 | 10 | 9 | 9 | 7 | 7 | 6 | 6 | 7 | 8 | 7 | 6 | 4 | 2 | 1 | 標準偏差 |
| 要求・指示 | 1 | 1 | 1 | 3 | 7 | 6 | 8 | 8 | 6 | 3 | 1 | 0 | 2 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 1 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 15.3ヶ月 |
| 出現率 | 0.33 | 0.33 | 0.17 | 0.5 | 1.4 | 1.2 | 1.33 | 1.33 | 1 | 0.5 | 0.13 | 0 | 0.23 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0.14 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 2.98 |
| 挨拶 | 2 | 2 | 6 | 4 | 4 | 6 | 7 | 6 | 6 | 6 | 2 | 1 | 1 | 1 | 1 | 0 | 0 | 0 | 1 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 15.2ヶ月 |
| 出現率 | 0.67 | 0.33 | 1.02 | 0.67 | 0.8 | 1.2 | 1.17 | 1 | 1 | 1 | 0.25 | 0.1 | 0.11 | 0.11 | 0.14 | 0 | 0 | 0 | 0.14 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 3.51 |
| 質問 | 0 | 0 | 0 | 2 | 0 | 2 | 2 | 1 | 2 | 0 | 1 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 14.6ヶ月 |
| 出現率 | 0 | 0 | 0 | 0.33 | 0 | 0.4 | 0.33 | 0.17 | 0.33 | 0 | 0.13 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 2.12 |
| 形容・修飾 | 1 | 1 | 1 | 6 | 4 | 4 | 2 | 4 | 2 | 2 | 1 | 0 | 1 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 14.3ヶ月 |
| 出現率 | 0.33 | 0.33 | 0.17 | 1 | 0.8 | 0.8 | 0.33 | 0.67 | 0.33 | 0.33 | 0.13 | 0 | 0.11 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 2.74 |
| 乗り物 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 3 | 0 | 1 | 0 | 0 | 7 | 6 | 3 | 2 | 0 | 0 | 3 | 0 | 0 | 25.7ヶ月 |
| 出現率 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0.3 | 0 | 0.11 | 0 | 0 | 1.17 | 1 | 0.43 | 0.25 | 0 | 0 | 0.75 | 0 | 0 | 2.93 |
| 食物 | 0 | 0 | 2 | 3 | 1 | 5 | 7 | 10 | 2 | 4 | 3 | 2 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 1 | 1 | 1 | 0 | 0 | 0 | 1 | 0 | 16.8ヶ月 |
| 出現率 | 0 | 0 | 0.33 | 0.17 | 0.2 | 1 | 1.17 | 1.67 | 0.33 | 0.67 | 0.38 | 0.2 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0.17 | 0.14 | 0.13 | 0 | 0 | 0 | 0.5 | 0 | 4.33 |
| 動物 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 1 | 4 | 0 | 0 | 1 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 3 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 19.6ヶ月 |
| 出現率 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0.17 | 0.67 | 0 | 0 | 0.13 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0.5 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 4.68 |
| 衣類 | 0 | 1 | 0 | 4 | 2 | 6 | 6 | 8 | 4 | 4 | 2 | 0 | 3 | 3 | 0 | 0 | 3 | 0 | 1 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 16.9ヶ月 |
| 出現率 | 0 | 0.33 | 0 | 0.67 | 0.4 | 1.2 | 1 | 1.33 | 0.67 | 0.67 | 0.25 | 0 | 0.33 | 0.33 | 0 | 0 | 0.5 | 0 | 0.14 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 3.84 |
| 用品 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 3 | 0 | 3 | 0 | 1 | 1 | 2 | 1 | 2 | 2 | 1 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 1 | 0 | 0 | 0 | 19.5ヶ月 |
| 出現率 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0.6 | 0 | 0.5 | 0 | 0.17 | 0.13 | 0.2 | 0.11 | 0.22 | 0.29 | 0.14 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0.17 | 0 | 0 | 0 | 4.2 |
| 玩具 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 1 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 26.0ヶ月 |
| 出現率 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0.17 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 |
| 個数合計 | 4 | 5 | 10 | 22 | 18 | 32 | 33 | 44 | 20 | 20 | 12 | 8 | 8 | 7 | 3 | 1 | 10 | 11 | 7 | 3 | 0 | 1 | 3 | 1 | 0 | |
| 平均個数 | 1.33 | 1.67 | 1.67 | 3.67 | 3.6 | 6.4 | 5.5 | 7.33 | 3.33 | 3.33 | 1.5 | 0.8 | 0.89 | 0.78 | 0.43 | 0.14 | 1.67 | 1.83 | 1 | 0.38 | 0 | 0.17 | 0.75 | 0.5 | 0 | |

後11ヶ月のB)、「靴」(生後12ヶ月のCとD)が最初に出現する。「帽子」と「靴」は散歩に関するサイン、「ミルク」は食事に関するサインである。散歩と食事は、子どもたちの園生活の中で、関心や楽しみの中心である。「リンゴ」「バナナ」「薬」「ネコ」「ウサギ」や、「自動車」「電車」などの名詞的サインは14ヶ月以降に出現する。

保育者による補足説明的記述の中には次のようなことが挙げられている。

- ア) 絵本を見ながら「ウサギ」「ゾウ」のサインをする(生後26ヶ月のX)
- イ) 歌に合わせて「自動車」「電車」「ヘリコプター」などの乗り物のサインをする(生後25ヶ月のUとV、生後26ヶ月のWとX、生後28ヶ月のZ)
- ウ) 「おやつ?牛乳?」と保育者に言葉で尋ねながら、「ミルク」のサインをする(生後26ヶ月のS)
- エ) 散歩に出かける時に自分の靴が見つからず「靴」のサインをする(生後25ヶ月のU)
- オ) 保育者の「サッカーしよう」の言葉掛けに対して「ボール」のサインをする(生後26ヶ月のX)

等である。

相手とのやりとりに関するサインがまず出現し、「衣類」、「食物」などの基本的生活に関するサインがその次に現れ、「動物」、「乗り物」「玩具」などの絵本や歌に出てくるサインはそれらの後に出現している。

Table3は各回に保育者が気づき想起記録した各児の自主的に用いるベビーサイン数を示す。各対象児を表しているアルファベットAからMは0歳クラス児、NからZは1歳クラス児である。各児の調査期間6ヶ月間中の月

齢、この保育園でベビーサインの教示を受けた期間をそれぞれ月齢、期間の欄に示している。例えばAは調査開始時には生後6ヶ月、調査終了時には生後11ヶ月であったこと、ベビーサインの教示を調査開始時までに4ヶ月間、調査終了時には9ヶ月間受けてきたことになる。また下段には月齢・教示経験期間・クラス別の平均値を挙げている。

ベビーサインは最も早いもので生後9カ月から出現している(A)。生後12ヶ月から19ヶ月の期間にサイン出現数5以上の者があり(DEF GHIM)、この間は他の時期に比べ自発的に用いられるベビーサインの数は多い。20ヶ月以降は出現数が減っている。しかし25ヶ月以降再び多数のベビーサインを使用する子どもがみられる。また調査期間を通して、ベビーサインを全く自発的に使用しない子どももいる(O)が、保育者に促されればベビーサインを使用する。

1回目から6回目までの調査で得られたベビーサインの成績それぞれにおける年齢、教示経験期間、クラスの影響を見るために、母集団分布を特定できないのでノンパラメトリック検定の複数の対応サンプルの検定であるFriedman検定を行った。

その結果、年齢・教示経験期間・クラスと6回の成績とについてはすべて有意な差がみられた(年齢: $\chi^2=22.142$ df= 6 P=.001 教示経験: $\chi^2=23.334$ df= 6 P=.001; クラス: $\chi^2=15.770$ df= 6 P=.015)。Bonferroniの調整による多重比較を行ったところ、年齢と教示経験については有意差が認められた。

年齢については、調査4回目、5回目、6回目は調査を始めた第1回目の時に最年少であった生後6ヶ月から12ヶ月児のグループと

Table3 対象児別ベビーサインの出現数

| 対象児 | 月齢 | 期間（月） | 調査1回目 | 調査2回目 | 調査3回目 | 調査4回目 | 調査5回目 | 調査6回目 |
|---------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|
| A | 6～11 | 4～9 | 0 | 0 | 0 | 4 | 2 | 3 |
| B | 7～12 | 4～9 | 0 | 0 | 0 | 3 | 3 | 3 |
| C | 7～12 | 5～10 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 4 |
| D | 11～16 | 0～5 | 0 | 6 | 6 | 11 | 11 | 15 |
| E | 11～16 | 0～5 | 3 | 2 | 2 | 7 | 6 | 7 |
| F | 11～16 | 4～9 | 1 | 5 | 3 | 8 | 9 | 9 |
| G | 12～17 | 5～10 | 2 | 4 | 1 | 6 | 6 | 4 |
| H | 13～18 | 11～16 | 3 | 5 | 1 | 7 | 7 | 8 |
| I | 15～20 | 1～6 | 0 | 0 | 5 | 0 | 0 | 0 |
| J | 17～22 | 0～5 | 0 | 0 | 0 | 0 | 1 | 0 |
| K | 17～22 | 6～11 | 0 | 1 | 0 | 0 | 0 | 1 |
| L | 17～22 | 6～11 | 4 | 0 | 1 | 0 | 1 | 2 |
| M | 18～23 | 6～11 | 11 | 11 | 2 | 3 | 1 | 1 |
| N | 19～24 | 11～16 | 0 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 |
| O | 19～24 | 1～6 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 |
| P | 19～24 | 0～5 | 0 | 1 | 1 | 1 | 1 | 0 |
| Q | 20～25 | 11～16 | 1 | 1 | 1 | 0 | 0 | 3 |
| R | 20～25 | 6～11 | 3 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 |
| S | 23～28 | 6～11 | 0 | 0 | 0 | 1 | 0 | 0 |
| T | 24～29 | 11～16 | 0 | 0 | 0 | 1 | 0 | 0 |
| U | 25～30 | 11～16 | 4 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 |
| V | 25～30 | 6～11 | 3 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 |
| W | 26～31 | 11～16 | 3 | 0 | 0 | 0 | 0 | 3 |
| X | 26～31 | 11～16 | 7 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 |
| Y | 27～32 | 11～16 | 6 | 1 | 0 | 0 | 0 | 1 |
| Z | 28～33 | 5～10 | 2 | 0 | 1 | 0 | 0 | 0 |
| 合計 | | | 53 | 38 | 25 | 53 | 49 | 65 |
| 平均値 | | | 2.039 | 1.462 | 0.962 | 2.039 | 1.885 | 2.5 |
| 標準偏差 | | | 2.72 | 2.657 | 1.562 | 3.156 | 3.154 | 3.647 |
| 月齢 | | | | | | | | |
| 6～12ヶ月 | 平均値 | | 0.857 | 2.427 | 1.714 | 5.571 | 5.286 | 6.429 |
| | 標準偏差 | | 1.215 | 2.573 | 2.215 | 3.599 | 3.904 | 4.392 |
| 13～18ヶ月 | 平均値 | | 3 | 2.833 | 1.5 | 1.667 | 1.667 | 2 |
| | 標準偏差 | | 4.29 | 4.446 | 1.871 | 2.875 | 2.658 | 3.033 |
| 19～24ヶ月 | 平均値 | | 0.571 | 0.429 | 0.429 | 0.571 | 0.286 | 0.571 |
| | 標準偏差 | | 1.134 | 0.535 | 0.535 | 0.536 | 0.488 | 1.134 |
| 25～30ヶ月 | 平均値 | | 4.167 | 0.167 | 0.167 | 0 | 0 | 0.667 |
| | 標準偏差 | | 1.941 | 0.408 | 0.408 | 0 | 0 | 1.211 |
| 教示経験期間 | | | | | | | | |
| 0～2ヶ月 | 平均値 | | 0.5 | 1.5 | 2.333 | 3.167 | 3.167 | 3.667 |
| | 標準偏差 | | 1.225 | 2.345 | 2.582 | 4.708 | 4.446 | 6.218 |
| 3～5ヶ月 | 平均値 | | 0.833 | 1.5 | 0.833 | 3.5 | 3.333 | 3.833 |
| | 標準偏差 | | 0.983 | 2.345 | 1.169 | 3.209 | 3.559 | 2.927 |
| 6～8ヶ月 | 平均値 | | 3.5 | 2 | 0.5 | 0.667 | 0.333 | 0.667 |
| | 標準偏差 | | 4.037 | 4.427 | 0.837 | 1.211 | 0.516 | 0.817 |
| 9～11ヶ月 | 平均値 | | 3 | 1 | 0.375 | 1.125 | 1 | 2 |
| | 標準偏差 | | 2.618 | 1.69 | 0.518 | 2.416 | 2.449 | 2.726 |
| クラス | | | | | | | | |
| 0歳クラス | 平均値 | | 1.846 | 2.615 | 1.615 | 3.769 | 3.615 | 4.385 |
| | 標準偏差 | | 3.105 | 3.404 | 1.981 | 3.745 | 3.754 | 4.331 |
| 1歳クラス | 平均値 | | 2.231 | 0.301 | 0.308 | 0.308 | 0.154 | 0.615 |
| | 標準偏差 | | 2.386 | 0.48 | 0.48 | 0.48 | 0.376 | 1.121 |

他の月齢のグループとの間に差があり、調査後半の4から6回目の時期については、最年少グループのベビーサインの出現数が多いことが分かった。

教示経験期間については、教示経験期間が短いグループは調査4回目以降のベビーサイン出現数がやや多く、期間が長いグループは調査1回目の出現数がやや多い。

クラスについては、0歳児クラスでは調査後半が出現数が多く、1歳児クラスでは、調査1回目が多く見えるが統計的には有意ではなかった。

全体的考察

集団保育に出現するベビーサインの特徴

- 1 自発的に使用するベビーサインは、生後9ヶ月頃から出現する。

この時期は一般的に、模倣が始まってから1、2ヶ月が過ぎ、自発的な指さしが登場し始めるころである。集団保育では、早期からベビーサインに触れる機会が多いこともあり、初出時期は家庭児 (Acredolo, & Goodwyn, 1985; Goodwyn & Acredolo, 1993) よりも比較的早い。

- 2 12ヶ月ごろから増加し16ヶ月ごろがそのピークである。

Acredolo & Goodwyn, (1985) でも12ヶ月から17ヶ月ごろにかけてベビーサインが獲得されており、自発的使用の多く見られる時期は本研究とほぼ一致している。この時期は、一般的に一語発話が始まるころである。

- 3 ベビーサインの種類として、「挨拶」、「要求・指示」、「形容・修飾」等が最初に獲得され、「食物」、「動物」、「乗り物」等の名詞はその後に出現する。

高井・高井 (1996) は、身振りを、対象を

表示する身振りと状態・動作などの事象に関連した状況を表す身振りに分けている。家庭児については、この2種の身振りは生後11ヶ月から自主的に用いられるようになるが、1歳3ヶ月の後半以降には、新出身振りは事象を表す身振りのみとなり、それには音声言語を伴う場合が多いことを見出している。集団保育の中で予め定型化された身振りを意図的に教示される本研究の対象児では、生後9ヶ月から、対象を指示する名詞的なベビーサインよりも相手とのやりとりや相手の存在を意識した、「挨拶」、「要求・指示」、「形容・修飾」などを表すベビーサイン、高井ら (1996) のいう状態・動作などの身振りがまず自発的に使用されている。そしてその後、生後10、11ヶ月から名詞のベビーサイン、対象を表示する身振りが現れている。状態・動作を示す身振りに相当するベビーサインは、高井らの自然発生的な象徴的身振りよりも2ヶ月早くから出現してきていることになる。また Goodwyn & Acredolo (1993) では、家庭児22名のうち、1名の女児が8.75ヶ月時に最初のサインを使うようになったが、その他の21名の子どもたちは11ヶ月以降であったことが示されている。Acredolo & Goodwyn (1985) では、家庭児1名について、生後12.5ヶ月時におとなの動作の自発的な模倣が出現し、12.5ヶ月～17.5ヶ月の5ヶ月間に29のサインを獲得したこと、そのうち子どもの自発的なサインは13個であり、16.75ヶ月から二語発話を使い始めると、2つのサインを組み合わせたり、言葉にサインを伴わせたりできるようになったこと、おとなが教えたサインは動物名など対象を示す名詞的な単語であったことが示されている。

本研究の結果はこれらの家庭児に関する先

行研究と比べ、集団保育児では比較的早くからサインが出現することを示している。保育園では、0歳クラスにおいても、年度のはじめの4月から、保育者がベビーサインを用いた保育を行っている。早期からサインを見る機会が多くあることが、サインの出現時期を促進すると考えられる。また例えば本研究ではAcredolo & Goodwyn (1985) に出現したベビーサイン 'Big' に当たるベビーサイン「大きい」は全く観察されていない。これは保育者自身も保育中に全く使わないサインである。おとながどのようなベビーサインを導入するか、どのようなサインに多く触れる機会のある環境なのかなど子どもの生活環境の違いにより獲得されるサインの種類は異なることは想像される。

「挨拶」「要求・指示」や「おいしい」という楽しい食事に関する「形容・修飾」のサインは保育者の使用するベビーサインの中でも使用頻度の高いものであり（赤津・三浦, 2010）、これらは保育場面で子どもたちが頻繁に遭遇するサインである。また、「要求・指示」は子どもの集団の中で、自分の存在をアピールするのに必要なサインでもある。霊長類の手話に関しても、例えばワシューは「来て」「ちょうだい」「もっと」といった「要求」の手話を最初に覚えている（Gardner & Gardner, 1969）。集団生活の中で、「挨拶」は特に注意が払われる活動である。これは日本では躰として食事の時に「いただきます」「ごちそうさま」という挨拶が習慣づけられていることが関係している。保育園という集団では、「保育所保育指針」（2008）にも明記されているように、挨拶をすることが重視されている。子ども自身が挨拶をすること、「挨拶」のベビーサインを見たり、実際に促されて使

用したりすること等の経験の影響により、「挨拶」等のベビーサインが先行すると考えられる。この園でも毎月の観察時に必ず食事の前後には挨拶をさせている様子が見られた。

「いただきます」については、保育者は、子どもたち全体に対してベビーサインをしながら「いただきます」と言うので、子どもはそれを見ることにより、模倣から徐々に自発的にベビーサインを行うようになる。「ごちそうさま」については、個々の子どもの食事が終了した時点で保育者はサインをしながら「ごちそうさま」と言ったり、子どもの背後に回り、手を取って「ごちそうさま」と言いながらサインをさせたりしている。「ごちそうさま」に関しては、米国のベビーサインに関する啓蒙書では、食事が終了した時点でASLの“all done ; all gone”を用いると書かれている（Garcia, 1999 ; Acredolo, Goodwyn, & Abrams, 2002 ; Beyer, 2006 ; Simpson, 2008）が、「いただきます」に関するサインについては特別には取り上げられていない。食事の時に祈禱することがこの代わりになっているものと思われる。

「リンゴ」「バナナ」「薬」「ネコ」「ウサギ」や、「自動車」「電車」などのベビーサインは生後14ヶ月以降に出現する。リンゴとバナナは食事のデザートによく出される果物である。薬は保護者が、体調が悪い子どもが保育中に服用するように、保育者に託することが多くあるもので、子どもたちは仲間が薬を服用するのを頻繁に目撃している。なかには体調は良好なのに自分も薬を服用したいと主張する子どももいる。ネコやウサギ、自動車、電車は絵本の中や、手遊び歌、童謡の中によく登場し、保育者とともにサインで表すことがよくあるものである。これらのことは、6回の

観察の際にみられた。

もともとベビーサインは相手とのコミュニケーションを図るために考案されたものであり、今回の調査では、相手とのやり取りや相手を意識したサイン、生活に密着したサインの方が対象を表す名詞的なサインよりも先に使用されるようになることが示唆されたが、これが、集団保育の中での特徴なのか否かについては家庭児の資料と比較する必要がある。また、日本の文化に根ざすものなのかどうかについても検討する必要がある。

4 集団保育でベビーサインを獲得していく過程には年齢の影響が大きく、教示経験期間、クラスの影響はそれに比べ少なかった。

ベビーサインの出現に与える年齢・ベビーサインの教示経験期間・同じクラスで学ぶという経験の共有の3側面の効果については、特に年齢の効果は見られたが、教示経験期間、同じクラスで学ぶという経験の共有の効果は明確には見られなかった。年齢の効果については最年少グループにおいて最も強く表れていた。

集団保育では4月生まれから翌年の3月生まれまでを同一クラスとして共通の経験を与えている。0歳児クラスでは、前年から在籍していたため教示経験期間が長い者(H)、4月から入所した者、中途入所の者など異なる教示経験期間の者が混合している。1歳児クラスもまた前年から在籍していて教示経験期間の長い者、4月から入所した者、中途入所した者の混合クラスとなっている。教示期間の長短にかかわらず、0歳児クラスの生後9ヶ月から17ヶ月の時期の子どもにベビーサインが多く出現している。入所後1ヶ月、2ヶ月目であっても年齢がこの水準に達していれ

ばすぐにベビーサインを使用するようになり、どれぐらいの期間ベビーサインを習っていたかという教示経験期間は、ベビーサインの出現時期、使用頻度への影響は強くはなかった。

保育者もクラスの子どもたちの多くがベビーサインを使用していればそれに合わせて自らもサインを使用する機会が増えるであろう。子どもたちも友達がサインを使っているのを見ると自分も使うように努力することもあるであろう。クラスの効果については、同じクラスで学ぶという経験の共有だけではなく年齢の効果も影響しており、明確に効果を確認することはできなかった。

効果のある教授時期に関しては、ベビーサインを使用する保育の影響を最も受けているのは最年少グループである。集団保育では、ベビーサインを用いた保育の影響力は1歳児クラスよりも0歳児クラスに対して強くあるということである。

構音器官が未発達で言葉が話せない時期には、子どもは保育者とコミュニケーションを図るのにベビーサインを用いるが、言葉を話せるようになると、会話による意思疎通が主になりベビーサインは使用されなくなる。使用するベビーサインの種類も、初期には相手とのやり取りに関するサインが多く、その後基本的な生活に関するサインを経て、絵本や歌に出てくるサインへと変化している。ベビーサインの種類が変化する要因として、子ども自身が言葉を話せる年齢になっても単語や言葉による表現の仕方がわからない時にベビーサインを使用したりすることが考えられる。また保育者が子どもの成長に合わせて使用するサインを変化させたりサインを使用しなくなったりすることの影響も考えられる。これについてはビデオ映像などの資料を収集し

検討する必要がある。

引用・参考文献

- Acredolo, L.P. & Goodwyn, S.W. 1985 Symbolic gesturing in language development: A case study. *Human development*, 28, 40-49.
- Acredolo, L.P. & Goodwyn, S.W. 1996 *Baby signs: How to talk with your baby before baby can talk* The Miller Agency, Inc. (アクレドロ, L.P.・グッドウィン, S. たきざわあき (編訳) 2001 ベビーサイン まだ話せない赤ちゃんと話する方法 径書房) Acredolo, L.P., Goodwyn, S.W., & Abrams, D. 2002 *Baby signs: How to talk with your baby before baby can talk. (new edition)* The McGraw-Hill Companies.
- 赤津純子・三浦香苗 2010 集団保育に取り入れられたベビーサインに関する研究：保護者・保育者への質問紙調査結果の報告 昭和女子大学生活心理研究所紀要 12, 39-49.
- Beyer, M. 2006 *Baby talk: A Guide to using basic sign language to communicate with your baby*. Penguin Book Ltd..
- Garcia, J. 1999 *Sign with your baby: How to communicate with infant before they can speak*. Northlight Communications, Inc..
- Gardner, R.A. & Gardner, B.T. 1969 Teaching sign language to a chimpanzee. *Science*, 165, 664-672.
- Goodwyn, S.W. & Acredolo, L.P. 1993 Symbolic gesture versus words : Is there a modality advantage for onset of symbol use? *Child Development*, 64, 688-701.
- 小林晴美・佐々木正人 1997 子どもたちの言語獲得 大修館書店
- 小林晴美・佐々木正人 2008 新・子どもたちの言語獲得 大修館書店.
- 近藤禎子 2004 ベビーサイン：ゲーとパーだけで赤ちゃん与会話 毎日新聞社.
- 厚生労働省 2008 保育所保育指針 フレーベル館.
- 小椋たみ子 1999 語彙獲得の日米比較 (桐谷滋 (編)

ことばの獲得143-194) .ミネルヴァ書房.

森敏昭・吉田寿夫 1990 心理学のためのデータ解析
テクニカルブック 北大路書房.

Simpson, T. 2008 *The Everything Baby Sign Language Book*. F+W Publications Inc.

志村洋子. 1989 赤ちゃん語がわかりますか：マザリーズ育児のすすめ 丸善メイツ.

高井直美・高井弘弥 1996 初期シンボル化における身振り動作と音声言語との関係 発達心理学研究 7, 20-30.

Thompson, R.H., Cotnoir-Bichelman, N.M., McKerchar, P.M., Tate, T.L. & Dancho, K.A. 2007 Enhancing early communication through infant sign training. *J. Appl. Behav. Anal.*, Spring ; 40 (1), 15-23.

吉中みちる・吉中まさくに 2002 赤ちゃんとお手てで話そう (書籍) 実業之日本社.

Appendix1 ベビーサインの例

いただきます (ごちそうさま) : 両手を胸の前で合わせ、軽く会釈する

おしまい : 上に向けた両手のひらを内側に反して下に向ける (アメリカ手話 (ASL) と同一) (日本の手話では肩の上あたりで上向きに開いた両手をすばめながら下に下ろす。)

バナナ : 人差し指を立てバナナを表し、もう片方の手で皮をむく動作をする (ASL と同一) (日本の手話では左手の 5 本の指をすばめてバナナを形どり、右手でバナナの皮をむくように上から下へと動かす。)

謝辞

本論文の調査にご協力いただきました保育園の園長先生をはじめ、保育士の先生方、園児の皆様、懇切にご指導・ご助言くださいました千葉大学名誉教授三浦香苗先生、統計法について貴重なご助言をいただきました横浜国立大学名誉教授塗師斌先生に深く感謝申し上げます。